

序

医療技術の急速な発展と生活様式の変化により、日本は現在世界一の長寿国となった。喜ばしい事ではあるが、高齢者は複数の疾患を合併し、複数の診療科・医療機関を受診していることが多く、その結果多種類の処方薬を使用しきれずに、残薬が増え続けることが社会問題となっている。残薬の原因は、単に処方の剤数が多いだけでなく、不要な薬が漫然と投与されていたり、処方薬の重複が放置される、あるいは相互作用による有害事象の可能性など、いわゆるポリファーマシー状態となっている事が多い。2016年の診療報酬改定には「薬剤総合評価調整加算」が新設されており、複数の薬剤の投与について総合的に評価を行い、2種類以上減少した場合の評価が診療報酬に反映されることとなった。このように不適切な多剤使用を解消し、適切な処方の確実な服用・施用を促すことは、薬物治療の質向上に貢献するものであり、特に高齢者医療では必須の活動である。臓器別あるいは専門分化した診療が一般化した現在では、処方を横断的に評価できる薬剤師に、上記のような処方の総合評価と調整が期待されている。

総合診療医教育の中から指摘されたポリファーマシー問題は¹⁾、いま薬剤師の間で非常な関心を呼んでおり、学会では必ずと言っていいほどシンポジウム等が開催されている。薬物相互作用は薬学の研究テーマとして確立されたジャンルであるが、そこにポリファーマシー問題が浮上したため、薬剤師の関心に火が付いた感がある。本書では病院および薬局の豊富な症例を踏まえて、多剤併用をどのように読み解き、必要な是正を提案するかを具体的に示している。医師の意見も掲載しており、特に昨年末日本老年医学会から発表された「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015」については、作成グループ代表の秋下雅弘教授から直々に解説を頂いている。

病態から患者を診る医師の視線と、薬から患者をみる薬剤師の視線が交差し化学反応を起こすところから、安全で効果的な薬物治療が可能になると考える。昨今の社会情勢に鑑み、薬剤師は今までの殻を破って処方と患者ケアの適正化に向け、新たな一歩を踏み出さねばならない。そのツールのひとつとして、本書がいささかでも役に立てば幸いである。

2016年9月

神戸大学医学部附属病院 教授・薬剤部長
平井みどり

1) 「提言-日本のポリファーマシー」(徳田安春/編), カイ書林, 2012